夏合宿の思い出

金井　均

—その1—　上野～椎内

上野駅20番ホームには、輪行袋をかついだ我々が、急行「十和田」が入線するのを今か今かと待っていた。ところが、その中で1人だけ輪行袋も持たず、我々を見送りに来たかのような変な人がいた。「西尾さん、輪行袋を持ってこないでどうしたんですか。」と僕が聞くと、西尾さんは、うでと足を見せて言い訳した。ああなんと恐しいことだ、西尾さんは、予備合宿でカとブヨの大群に襲われ、そのうでと足は、あの半魚人も驚くという「うつぼ人間」化してしまっているのだ。結局、西尾さんは、我々と1日遅れて来て合入することとなり、我々は、西尾さんを後に上野駅を出発した。しかし、日本は長い、東京—椎内間は1600 Kmもあるのだ。その間、列車、船を乗りついでなんと35時間もかかった。そして、その日は、僕の生涯のうち一番長い日となった。

—その2—　礼文島

礼文島では、ついに出ましたあの噂に聞く大塚さんの「ぶっちぎり」、そして、それを追う小島さんと亀山、僕にはとてもついて行けないぜ。とにかく、ひたすら番深まで漕ぎ続けた。

—その3—　旭川駅

「おい金井、あと10分で列車に乗るぞ。急いでしたくしろよ。」

……そんなこと急に言って起こされたって，まだ朝の6時，こっちはまだ眠いのだ。とにかく，しかたがないのです飛び急いで寝袋をたたみ，洗濯物をたたんで，改札口を通って列車に飛び乗った。だが，列車の中で寝ぼけまなこで着代えをしたのがまずかった。ボックスの所にさいふを置き忘れたまま，みんなのいる車両へ行ってしまった。そして，僕の8千円と周遊券のはいったさいふは，変な女に置き引きされてしまった。「あのさいふは，私の命だ～。」，チクショー　僕も本当にあほだなあとつくづく思った。でも，僕が困っているのを親切に助けてくれた車掌さん，本当にありがとう。

－その4－　積丹半島

余市駅で，我々は，西口と志波に落ち会うことになっていた。2人は　目でたく8月1日に長坂自動車教習所を卒業し，（なお西口の場合は，教官のおなさけによってであるが…）我班に合入するのであった。2時間も待たされたあげく　やっと2人とも来た。そして　自転車を組み立て，一路，積丹半島の先端の余別へと向った。途中，海水浴場がたくさんあり，道をとても美人などキニスタイルのボインねえちゃんが歩いているのが見えた。案の定，スケベの西口もそれに気がついたらしく　ニヤニヤ笑っていた。そして，その時だけが，本合宿最初で最後の「女への意識」であった。

そして、余別でキャンプし、僕たち1，2年でめしを作ることとなった。だが、水は変な家からのもらいもので、鉄さびでうす茶色をしていた。その水で米をといで料理したんだからたまらない。とても食欲なんてわかなかった。でも、ブタ汁だけは、なんとか食えた。

—その5—　洞爺湖～支笏湖

有珠山、昭和新山を見に行ったが、急に有珠山が、ボンと小爆発を起こして、灰で空がま白となり、驚いた。おまけに、正午のサイレンがウーと鳴り響き、あわや避難警報が鳴ったのかと思いぶったまげたぜ。そしてそれから、我々は支笏湖へと向ったが、途中、美笛峠まで1，3年にぶっちぎられるし、僕たち2年は「力なしの証明」だった。さらに、支笏湖に着くすぐ手前で、志波のオッサンはパンクするし、とにかく、さえなかった。そしてその日と次の日、支笏湖のキャンプ場に連泊し、湖でいろいろ遊んで楽しかった。

—その6—　札幌の夜

僕は、みんなと離れ、北大の医学部にいる友だちに会いに、そのアパートまで行った。ところが、やつはもう東京に帰ったのこと、ちえ、せっかくすすきのへ連れてってもらおうと思ったのにしかたがないので帰ってみると、志波たち2年と1年の亀山、佐藤が、2500円もするステーキを食っているではないか。僕は、い

つものカツ丼ぐらいを注文しようかと思ったが、それでは、カッコがつかないので、しかたなく、「すみません、同じのください。」と言ってやった。

そして、みんなですすきのまで飲みに行った。しかし、すすきのて高いね～。オールド１本、その他おつまみで１万４千円もしやがった。